
❖ 講演会 ❖

第4回沼田智秀仏教書籍優秀賞受賞記念講演会

最後の念仏の力によって
—平安・中世に見る臨終行儀—

**By the Power of One's Last Nenbutsu:
Deathbed Practices in Early Medieval Japan**

2019年2月7日（木）15:00～16:30

龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室



会場の様子

（龍谷大学大宮学舎 西翼2階大教室）

❖ 講演会の概要 ❖

「沼田智秀仏教書籍優秀賞」は、特に西欧における仏教研究のさらなる発展を支援するために、2009年に設立された賞である。毎年審査委員会が開催され、公正な審議の上、英語で執筆された仏教学術書籍の中から優秀な書籍が選定されている。2017年度の受賞者は、*Right Thoughts at the Last Moment: Buddhism and Deathbed Practices in Early Medieval Japan*. (『臨終正念—中世初期の仏教と臨終の実践—』)を上梓したジャクリーン・I・ストーン博士（プリンストン大学宗教学部教授）に決定した。ストーン博士の主要研究領域は中世日

本の仏教である。また法華経、特に天台、日蓮宗の教義とともにそれらの現代における再定義についても研究を続けている。

2019年2月7日（木）、ストーン博士が「最後の念仏の力によって—平安・中世に見る臨終行儀—」と題した受賞記念講演を行った。講演の中でストーン博士は、仏教における臨終行儀とはいかなるものかについて解説し、日本においてこの儀礼がどのように伝播したかについて述べた。そして、善知識がこの儀礼で果たした役割についても言及した。

The Toshihide Nowata Book Award in Buddhism was established in 2009 in order to support the further development of the Buddhist studies especially in the Western world. The ening entry for rthe best academic Buddhist title of the year is selected by an independent committee. The awardee for fiscal year 2017 was Dr. Jacqueline I. Stone, Professor, Department of Religion, Princeton University, and her *Right Thoughts at the Last Moment: Buddhism and Deathbed Practices in Early Medieval Japan*. Dr. Stone's chief research area is medieval Japanese Buddhism. And also, She is ongoing research the traditions of the *Lotus Sūtra*, particularly Tendai and Nichiren Buddhism, as well as their modern redefinitions.

On February 7, 2019, Dr. Stone held the special lecture whose title was “By the Power of One’s Last Nenbutsu: Deathbed Practices in Early Medieval Japan.” In her lecture, Dr. Stone explained what the *deathbed practices* 臨終行儀 in Buddhism is, and she mentioned how this practices progagated to many people in Japan. And also, Dr. Stone dealt with the role that *Kalyāṇa-mittatā* 善知識 played in this practice.

<講演>

テ ー マ : 「最後の念仏の力によって—平安・中世に見る臨終行儀—」

By the Power of One’s Last Nenbutsu: Deathbed Practices in Early Medieval Japan

講 演 者 : ジャクリーン・I・ストーン博士 (プリンストン大学宗教学部教授)



ジャクリーン・ストーン氏
(プリンストン大学宗教学部教授)

2019年2月7日(木)、プリンストン大学のジャクリーン・I・ストーン博士が、「臨終行儀」つまり、仏教において人が死へ臨む際の儀礼に関する講演を行った。ストーン博士は、仏教における死に対処する方法には、以下のような主に三つの論理・方策があったと言う。

- 1) 業・因果の理法に従い、生前に来世を保証できるほど善根を飢える
- 2) 葬送儀礼を通して、良い来ている人々が死んだ人々に功德を廻向して追善供養を行う
- 3) 「最後の念」の力を前提とし、臨終儀礼によって良い来世を目指す

3)の「最後の念」が来世に決定的な影響を与えるという考え方は、仏教だけに見られるものではないが、仏教におけるこのいわゆる「臨終正念」の特徴は、来世でより良い状況に生まれ変わるばかりでなく、(妄念や雑念が起こらない場合)生死の輪廻からさえ離れられる可能性もあるとされた点にある。大乘仏教では、この「臨終正念」は往生の概念と結びついており、例えば『観無量寿経』の「下品下生」の一節では、どんな悪人でも、臨終の際に阿弥陀仏を念じて「南無阿弥陀仏」を十回唱えさえすれば往生できると唱えられている。

最期の瞬間を儀礼の力によってコントロールしようとするのが、「臨終行儀」である。源信は『往生要集』の中で、病者を「無常院」に移し、彼ら彼女らにそこに安置された仏像の手に繋がった五色の糸を握らせ、仏が迎えに来る来迎の姿を観想することや、看護人は香を焚き、花を散らし、荘厳な雰囲気を作ること、そして病者の正念を惑わさないよう、見舞いに来る際は、酒を飲んだり、ネギやニンニク等の五辛を食べたりすることを禁止することなどが述べられている。さらに、病者の身体が「断末魔の風」という、苦しみに苛まれても最期まで正念を続けられるよう色々と励まし、念仏を十遍唱えさせることは、何よりも大事なことでとされていた。源信以降も、宗派を超えて「臨終行儀」に関する書は次々と作成された。そして、広く一般の人々にも広まっていった。

ストーン博士は、極楽浄土に往生したとされる人々の伝記を記したいわゆる「往生伝」は、「臨終行儀」を知る最高の情報源であると言う。そこに描かれている臨終の場面は、往生人がその死を迎える時を予見し、身体を清め、威厳のある姿勢をとって静かに終わりを迎えていることが多い。

「臨終正念」は特に戒律が保てなかったり、困難な仏道修行が出来なかったり、罪を犯さざるを得なかったりした人々にも往生の希望を与え、「悪人往生」の概念とつながっていった。また、臨終の様相は本人だけの問題ではなく、周りの人々にも影響を与えた。例えば高僧の場合、臨終が悪ければ、その悟りや教義の正当性に疑問を投げ掛けられる可能性があり、特に新しい仏教運動の祖師たちの臨終については、度々批判されることさえあったという。

死に瀕している人と一緒に念仏等を唱え、彼ら彼女らを支え導く重要な役割を果たしたのが「善知識」であった。源信以降の「臨終行儀」に関わる書を見ると、この「善知識」の役割が時を経るごとに重要になってきていることが分かる。平安・中世に「善知識」の役割を担った者は、官僧ではなく、死穢が問題にならない遁世僧であった。そして近世に入ると、寺檀制度のもと、「臨終行儀」は僧侶たちが檀家のため、決まった儀礼的サービスの一つとして行うようになり、それは20世紀のはじめ頃まで続けられたという。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔